

第28回言語教授法・カリキュラム開発研究会 国際言語文化センター開設15周年記念フォーラム

◆ 開催日時 2009年12月12日（土）12時45分～16時10分

◆ 受付時間 12時15分～

◆ 開催場所 甲南大学 5号館1階511講義室

◆ 次第

12:45 開 会

12:45～13:00 ビデオ（国際言語文化センター15年間の歩み）上映

13:00～13:15 ご挨拶 甲南大学長 高阪 薫

国際言語文化センター所長 胡 金定

<第1部>

13:15～14:10 講演「日本文化を外国にどう伝えるか」
—映画・笑い・歌の場合—

講師／評論家・芸能レポーター 井上 公造

プロフィール：1956年12月30日福岡生まれ 西南学院大学商学部卒業
経歴：フリーライター、(株)竹書房編集長を経て産経新聞に入社。サンケイスポーツ文化社会部記者として事件・芸能取材を担当。1986年梨元勝氏の「オフィス梨元」に入り芸能レポーターに転身。テレビ朝日『モーニングショー』『スーパーモーニング』『やじうまワイド』などにレギュラー出演した。その後、フリーとなり、1998年「メディアボックス」（現・株式会社KOZOクリエイターズ）を設立。芸能ジャーナリズムで幅広く活躍すると同時に、番組企画、芸能情報配信サービスなども行っている。

14:10～14:20 休 憩

<第2部>

14:20～15:50 パネルディスカッション「大学における外国語教育の現在と未来」

パネリスト

学長補佐・文学部教授

井野瀬 久美恵

国際言語文化センター教授（英語）

中村 耕二

国際言語文化センター教授（フランス語）

中村 典子

国際言語文化センター准教授（中国語）

石井 康一

モデレーター

国際言語文化センター准教授

伊庭 緑

15:50~16:10 質疑応答

16:10 閉 会

総合司会

国際言語文化センター准教授

柳原 初樹

16:20~ 懇親会 甲南大学5号館1階カフェ・パンセ

注：第28回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会は、国際言語文化センター開設15周年記念フォーラムとして、2009年12月12日（土）午後12時45分から511講義室で開催され、約180名の参加者があった。

第1部 講演

「日本文化を外国にどう伝えるか」 －映画・笑い・歌の場合－

講師／評論家・芸能レポーター 井上 公造

テレビ出演などで非常に多忙な井上公造氏の貴重な体験をもとにした講演は、国際言語文化センター15周年を記念するフォーラムにふさわしく、大変有意義なものであった。1時間ほどの講演時間も短く感じられ、最初から最後までわかりやすく面白い内容のトークで絶えず聴衆を引きつけ、ユーモアあふれる話術で会場に笑いをもたらしした。話の内容は予想していた芸能ネタにとどまることなく、言葉を学ぶことの大切さ、日本文化を伝えることの意義、海外で生活すること、成功することの困難さなど、多岐にわたるものであり、氏の知識や経験の幅広さが伺えた。

以下、井上氏の言葉を紹介しつつ、講演の要旨をまとめてみる。

講演の冒頭で、「僕が日頃やっているのは、誰と誰とが付き合っているか、誰と誰かが別れそうだというようなトークが多い」と笑いをとり、軽い気持ちでこの講演を引き受けたものの、与えられた「日本文化を外国にどう伝えるか」というテーマについて何を話せばよいかわかったことを述べた。しかし、そういった不安は全く感じさせず、実際に、取材活動を通して感じたこと、体験したことを、具体的かつ興味深い例を紹介しながら、主に、スポーツ、芸能、笑い、日本の伝統芸術をテーマに、外国語を学ぶことの意義を盛り込んだ話となった。

スポーツ

井上氏が、産経新聞のスポーツ部に配属にされた20数年前の頃、ほとんどの取材は国内で

行われ、海外取材というのは莫大な制作費用をかけたハリウッド映画の記者会見に招待されたり、スポーツ担当記者ならオリンピックの取材が主なものだった。だが、当初近鉄バッファローズにいた野茂選手がメジャーリーグに挑戦したのがきっかけで、その後イチロー選手や松井選手が次々とアメリカに行き、スポーツ新聞は日本のスーパースターの情報や現地での試合ぶりを原稿にせざるを得ない状況になっていった。そのため、当時、海外に特派員がいなかったスポーツ新聞では、社内で英語ができる記者を探し、海外留学経験なども調べた上で、現地に複数の記者を派遣したという。すると今度は、サッカーの中田選手がイタリアへ行き、その後、ヨーロッパ方面に進出するサッカー選手も増えて、現地で取材する機会や海外駐在員が増えた。そのため、スポーツ新聞業界は、不景気の中お金がかかって大変だったという状況を紹介しながら、武器となる語学力の大切さを伝えた。同時に、今は海外で活躍するスポーツ選手の多い時代であることも強調した。

また、日本で活躍する外国人力士、朝青龍や白鵬などが強い理由として、インタビューで十分理解できる日本語を話し、言葉をきちんと学んできたという姿勢があるからこそ、あそこまでの地位を築いてきたのではないかと述べた。海外で活躍するプロゴルファーの石川遼や宮里愛も、アメリカでインタビューを受ける際にある程度英語で答えており、これから世界で成功していくためには、スポーツ選手にとっても語学力が必須となる時代になるだろうということだ。

芸 能

次に、井上氏が現在専門としている芸能に関しての話に移り、「なぜ日本の芸能人は、海外に出てあまり成功しないのか」という興味深い疑問を投げかけた。以前、海外進出を試みた松田聖子やピンクレディー、ここ数年ではDreams Come Trueや宇多田ヒカルの例を挙げつつ、やはり、今までで一番ヒットした曲は、坂本九の「SUKIYAKI」、つまり、「上を向いて歩こう」ではないだろうかと言う。また、映画で言うと、ハリウッドで生活している渡辺謙や真田広之は、アメリカでもある程度の評価を受けているものの、おそらく日本人が思っているほどのポジションには登りつめていないという現実を指摘した。日本の芸能人で歌が上手い人や演技が上手い人も沢山いるのに、どうして海外でそれ相応の評価を受け、高い知名度を得ることが出来ないのかという問いに対して、色々と実体験した人々から氏が話を聞き、そして、出した答えは「言葉・文化・宗教観」を理解するということが、いかに大切であるかということだ。例えば、海外に住んで5～6年以上にもなる渡辺謙の体験談を紹介したが、渡辺謙はアメリカに行く前に、彼なりに一生懸命英語の勉強をしたにもかかわらず、アメリカでは非常に分厚く詳細が書かれている契約書を取りかわすのに苦労したこと。また、レストランで、食べたいものを注文するのに身振り手振りを使ったり、複数の人たちとぶつかったときにExcuse usと言われ、習ったことのない簡単な表現に戸惑ったりしたことなど、学校では教わらないことを見聞きすることが意外に多いと実感したそうである。井上氏は「現地

で生活しながら、事前に勉強していったことを実体験して、またそこにプラスアルファしていく」、「向こうの生活習慣や住んでみないとわからないようなことを体験して、やっと本物になっていく」、という経過と経験の大切さを主張した。実際に、ほとんどのアーティストが海外へ行ったときに短期間しか滞在しないことを述べ、それで現地で活躍するといっても、その土地のことを知らなければ、受け入れてもらえないのは当然だと理由づけた。

井上氏自身のインタビュー体験に関しても、特に語学力の大切さが述べられた。彼がマドンナやマイケル・ジャクソン、マライヤ・キャリー、その他、ハリウッドの大スターなど、多くの有名人にインタビューする機会があったにもかかわらず、ほんの10～15分程度の時間内で、英語力が足りないばかりに、通訳者を介してしか話ができず、細かなニュアンスがわからないまま悔しい思いをしたこと。また、東京キー局の一流大学を出たアナウンサーの人ですら、このような有名人に通訳なしでインタビューができる人は、ほとんどいないという事実も明かした。したがって、芸能レポーターやアナウンサーを目指すには、必ず語学力が必要だという話は、非常に説得力があった。また、今日、日本の芸能界も非常に国際化しているということに触れ、最近では、アメリカやアジア諸国のみならず、ヨーロッパやアフリカなど、国際色豊かなハーフやクォーターの方が沢山いるので、文化や習慣を理解しないでインタビューすると、とんでもないズレや勘違いが生じる恐れがあるということも指摘した。

さらに、井上氏は芸能界の仕組みをお隣の韓国と比較して説明し、韓国には国家プロジェクト的に芸能人を育てる環境があり、一流の俳優が知的で好印象であるのは、大学などで演技や言葉等をきちんと勉強しているからだと指摘する。それに対し、日本におけるエンターテインメントの分野は、あくまでもビジネスの域を超えず、国の理解は非常に乏しいということである。かつて、東ヨーロッパのスポーツ選手が強かった理由として、国を挙げて支持していることを述べ、やはり、国レベルで何の協力もないという面において、日本は非常に遅れていると指摘した。

お笑い

今回のテーマの一部である「映画・笑い・歌」の中で、比較的「笑い」のほうが、まだ海外に受け入れてもらいやすいのではないかと言う。例えば、志村けんの「アイーン」という言葉は、何語かわからないが、パントマイム的なことで笑いを取ることができるので、台湾では、非常に人気があると言う。そういう一発ギャグ的なことで、有名になることはある程度可能だということだ。ただ、漫才などは、日本語で行なうと外国の人に理解してもらえず、外国語になおすと「間」のようなものが難しく、大きな壁があると述べている。また、吉本興業が中国や韓国などへのアジア進出を狙っているという話にも及んだが、これは、その国に住む人に日本のお笑いを伝えるという目的ではなく、現地に住んでいる日本人を目当てにしてビジネスを展開しているために、なかなか外国の人に日本のお笑い文化が浸透していかないということだ。

また、井上氏にすれば、大阪は、別の地域から来た人間から見ると「日本ではない」と思うほど「ありえない文化圏」ということだ。よくテレビで流れている路上インタビューで、面白い内容のものを4～5件撮るのに普通は4時間程かかるところを、大阪では20分で十分可能だということだ。それも、カメラから逃げる人はほとんどおらず、むしろ、近づいて来る人が多いということである。また、年齢に関係なく2人組をつかまえると、片方がボケで片方がツッコミの役を演じるところが、大阪の元気の源だという。そういう文化の伝え方というのも、大切だと実感したということだ。

伝統芸術（歌舞伎）

井上氏によると、歌舞伎という日本の素晴らしい文化について、日本人より外国人のほうが詳しいことが多いと感じるそうだ。例えば、歌舞伎役者の中村勘三郎は「最近の日本人は、よく意味のわからないことを拒否する傾向がある」と言い、そのため、お客に理解を促す努力を求めるよりは、自分たちが歌舞伎をわかりやすく伝えるようにしていく工夫が必要だと感じているそうだ。実際に、歌舞伎座の1月の新春公演を、当初は異端児と呼ばれた市川猿之助が演出し、今話題の海老蔵が舞台に立つというようなことは、昔では考えられなかったそうである。また、このような若手を中心とした公演をアメリカ、パリ、イギリス、香港などでも計画しているということだ。ただ、井上氏が言うには、歌舞伎は、言葉がわからなくても、日本の美や表現法の素晴らしさを観て感じてもらうことで、言葉の壁を乗り越えられる文化だから、海外公演のほうが理解を得やすいのだという。それでも、中村勘三郎はアメリカ公演を控えた1年も前から、楽屋にアメリカ人の講師を呼んでマンツーマンで英語のレッスンを受けていたという事実も明かし、外国の方にも歌舞伎を受け入れてもらえるように、歌舞伎役者たちが色々と努力をしている様子を伝えた。そして、「やはり最後の最後は言葉なんですよ」とつけ加えた。

最後に、井上氏は言葉がわからないと日本の文化や色々なものを伝えていくということがいかに困難であり、また、演じる人や歌う人が海外で成功する可能性も低いことを改めて強調した。そして、世界の舞台で活躍するようになるには、小さな頃から、特に外国語を話す、聞くという環境に身を置くことの大切さについても言及した。例えば、帰国子女のように、若い頃から、その言語に触れる環境があり、そして、さらに高校、大学と進むにつれて、自分の専門分野について英語で話したり、聞いたりできるようになると理想的だと述べた。芸術や芸能の分野においても、今後、より多くの人が語学の力を発揮すれば、海外で芸能人やスポーツ選手として成功する人も増えるのではないだろうか。

（文責：吉田 佳代）

第2部 パネルディスカッション

「大学における外国語教育の現在と未来」

中村 耕二（英語）

言語文化教育，外国語教育は，人間理解教育だと考えており，国際理解教育，平和教育へとつなげていく必要がある。そして，世界に自分たちの文化や意見を発信していく力を育成するために，国際言語文化センターは，ただ言語の学習に終わるのではなく，使える言語の習得を目標とした学習者中心の授業を行うことが大切だと考えている。そのため，教員側の意識改革も必要であり，一方的に講義するというtop-downの授業ではなく，教員がFacilitatorとしての役割を担い，学生をサポートする教育を行っている。この様子は，次にビデオで紹介する授業風景よりうかがうことができる。例えば，1年生の基礎英語の授業では，全ての学生が教室内を動き回り，クラスメートに英語を使ってインタビューをする。また，Readingの授業も，学生が文章を訳すのではなく，自分なりに内容をまとめて意見を発表することで，クラスメートと知識を共有していくという常にインタラクティブなものである。教員は，学生の意見にコメントし，効果的に授業の進行をサポートするという脇役的存在である。グローバル・トピックスという授業では，ある学生がオバマ大統領の就任演説を読み，その内容を英語で批評し，自分が感銘を受けた部分なども説明する。そして，それが，クラスメートとのディスカッションへと発展する。上級スピーチの授業では，ディベートが行われ「イラク戦争に軍を派遣すべきか」や「英語を第二公用語にするべきか」について，学生が積極的に発言をする。このように，学生が間違いを恐れることなく，参加できる楽しい「Language Home」のような環境を作ることが，言語教育では必要である。

また，実際に海外で活躍する先輩たちを授業に招待することで，学生に刺激を与え，学習意欲を高めることができる。例えば，国際NGOで働き，ケニアのJICA事務所に勤務する宮田（徳岡）有佳さん。また，米国の航空会社ノースウェストに内定しながらも，カンボジアの孤児やタイの児童買春の問題に取り組むNPOのメンバーとして働く岩澤美穂さん。このように世界で貢献している本学の卒業生の話は，学生にとって非常に良いロールモデルとなる。その他，甲南大学で学ぶ留学生とともに授業を受けるJoint Seminarに参加するなど，留学生と日本人学生が共に学べる環境づくりも大切である。

中村 典子（フランス語）

国際言語文化センターにおける15年間の改革を、フランス語教育の立場から5つに分けて紹介する。まず、2001年に「国際言語文化科目」が開設され、全学部が2年次以降も第2外国語を重点的に学習することが可能となった。第2外国語（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語）とその言語圏の文化、国際理解について深く学習する「国際文化コース」、第2外国語と英語を並行して学ぶことができる「国際コミュニケーションコース」、第2外国語または英語の授業を週4回受講する「インテンシブコース」が新設されたからである。2つ目の改革は、国際言語文化センターでフランス語を担当する教員たちが協力して作成したオリジナル教材『Zéphyr フランス語文法の基礎』を「基礎フランス語Ⅰ」の共通教科書として1998年から使用していることである。2009年には「基礎フランス語Ⅱ」の共通教科書『Le français à la carte フランス語コミュニケーションの基礎』が本学の学生向けに編纂され、本センターのポータルサイトで音声を開いたり、ダウンロードすることができるようになった。3つ目の改革は、海外語学講座の実施、長期留学制度の実現である。8月の4週間、トゥーレス語学院の夏期講座（トゥール大学認定）に参加し、フランス語の運用能力を伸ばす機会を提供するのが海外語学講座である。また、協定校のトゥール大学（国立）またはリヨン第三大学（国立）で1年間勉強できる長期留学制度も整備され、積極的な学生交換が行われている。現在も本学から2名の学生がフランスへ留学中で、フランスからは6名の交換留学生が本学に来ている。5つ目の改革は、積極的な学生支援の実施である。各言語とも週1回、昼休みに「学習相談アワー」を開き、学生の相談や質問に応じるほか、フランス人留学生が日本人学生の質問に対応する「チューター制度」を設け、学生同士の国際交流の場を増やす努力もしてきた。さらに、第2外国語では「2泊3日の強化合宿」を行っており、フランス人留学生にも「ミニ授業」やレクリエーションを担当してもらうことで、学生たちは「フランス語で生活する擬似空間」を体験できる。

今後、本学のフランス語・ドイツ語教育で取り入れたいと考えているのは、1970年代からヨーロッパで研究され、2001年に最終版が公表されたCEFR（ヨーロッパ共通参照枠）という言語能力評価基準である。レベルはA1・A2・B1・B2・C1・C2の6段階に分かれており、異なる言語間でも共通の基準で学習者の能力評価が可能である。CEFRは、言語が何であれ、自分の言語能力を明確に測れるという意味で重要な指標であるだけでなく、どんな課題の遂行が可能か、というポジティブな捉え方をする。もとより、これと並行して、ヨーロッパ内の大学間の交換留学制度「エラスムス計画」が1985年から大々的に実施されている。（因みに、フランスの大学の学士課程に編入するには、フランス語のB2レベル以上、修士課程に入るにはC1レベル以上が必要とされる。）

ヨーロッパには、「多言語主義」と「複言語主義」という概念がある。その両者は、日本ではよく混同されるので以下に紹介する。

「多言語主義（多言語状態）」：multilinguisme

ある社会の中で複数の言語が共存し、別々に使用されている状態。また、それを認める考え方。（例えば、ベルギーには、フランス語・オランダ語・ドイツ語の3つの公用語がある。多言語主義に則ったEUの会議は、27カ国の代表が集まり、23の公用語が使われるのが原則である。）

「複言語主義」：plurilinguisme

複数の外国語の習得を通して、個人が必要に応じて言語を切り替え、個人的・職業的・社会的課題を解決することを目指す考え方。

EUでは、言語と文化の多様性への理解が重視されている。相互理解を深め、お互いを尊重することにより、平和と共存を守ろうとしているからだ。それゆえ、EUの市民には「母語+2外国語」の習得が推奨され、「複言語主義」が推進されている。

国際言語文化センターでも、母語以外に「英語+ヨーロッパ言語」または「英語+アジア言語」というかたちで、2つの外国語の習得をサポートしてきた。【フォーラム冒頭のビデオで紹介された国連職員、古我知さんは、フランス語と英語を駆使して、国連開発計画（UNDP）のブルキナ・ファソ支部で活躍する本学文学部の卒業生である。】

今後、CEFRを配慮した教育研究を進め、さらにカリキュラムを充実させ、言語・文化の多様性への共感、異文化理解、国際理解を深めた上で、「グローバル化社会」に対応できる人材を養成していきたいと考えている。最後に、EUの政策執行機関である欧州委員会のスローガンの引用でこの報告を締めくくりたい。

« Plus tu connais de langues, plus tu es humain »

「外国語を多く知っていれば知っているほど、君は人間的になれる」

石井 康一（中国語）

第2外国語としての中国語教育は、旧来のドイツ語・フランス語に続き、1994年にスタートした。現在は、新入生の45%が中国語を選択履修している。われわれはこの15年間、基礎のクラス人数を40人から25人以下に減らすなど少人数教育を具現化し、「甲南大学の中国語教育」の内容の統一化と明確化に取り組んできた。基礎・中級科目は統一の教科書を使用することとし、胡金定教授を中心に、変貌する中国社会ですぐに使える生きた表現を身につけることを第一に考えた教科書の編纂を進めた。現在、基礎・中級科目の8種類の教科書のうち6種類が胡先生を中心に編まれたものであり、それらの教科書は他大学でも広く採用され、非常に高い評価を受けている。今年度から基礎Ⅱ（会話中心）で使用している「すぐ話せる中国語」は、例文全てに日本語訳をつけた。訳読に時間を使わず、限られた授業時間内でマスターするための画期的な試みだが、訳文が付いていると教科書として売れなくなると出版社が難色を示したそうである。

また胡金定ドットコム<http://www.kokintei.com/>を開設し、これら教材コンテンツを音声付きで載せ、教室外でも学習することを可能にした。ウェブサイトを無料で広く公開し、世界のどこでも勉強できるようにすることで、われわれ自身も鍛えられていく。

社会に出るときに役に立つように、基礎科目でしっかりと学んだ後に中級・上級中国語を履修することの大切さを訴え続けてきた。第2外国語として学んだ中国語を就職で活かせるように学生たちをサポートしていくことも大切だと考えている。中国経済研究の大学教員になった先輩、北京・上海・台湾で仕事をする先輩、こうした卒業生の活躍をアピールすることで、学生の学習意欲を駆り立てることも必要である。大学生の第2外国語に対する学習意欲の低下にあわせて市販の教科書では軽く薄いものが増えているが、われわれは学生主体の立場に立って質・量とも骨太な中国語教育を進めたい。

中国語の文法はシンプルだが、それゆえの難しさもあり、乗り越えなければならない。発音も日本語母語話者にとって習得はかなりの困難をとまう。中国映画「promise 無極」に主演する真田広之が、当初は中国語の台詞は吹き替えの予定だったが、役者の意地で中国語を猛特訓し、「中国語用の筋肉もついてきて、出なかった音が出るようになり（本人談）」、ネイティブスピーカーの発音を習得したという。そのような困難を乗り越えて始めて見えてくるところに学生を導きたい。アンケートによると、中国語を学習する学生の中で中国に行きたいと思う学生の割合は決して高くない。そこで、実際に留学に行った人に対して中国人がどれだけ熱い心で接してくれるかということも伝え、文化的な壁を取り除く教育もしなければ、教室で学んだ中国語は生きてこないということになる。大切なのは教授法だけではない。web上で学習できる時代だからこそ、教室における教員の人間性が問われている。今後さまざまな課題に直面するであろうが、非常勤講師の先生方と連携して克服し、甲南大学の中国語教育全体のレベルを高めていきたいと考える。

井野瀬 久美恵（コメント）

学長補佐、文学部教授、歴史学者、そしてもうひとつ、某テレビ局の番組審議委員という立場を加え、この4つの立場からコメントさせて頂きたい。まずは学長補佐という大学の全学教育を考える立場に在る者として、国際言語文化センターの3人の先生の報告を誇らしい気持ちで聴かせていただいた。この15年間の試行錯誤のゆえにたどり着いた教授方法や皆の心がひとつになり共通の教科書まで作成するなど、今までの努力が克明にうかがえる。また、2つ以上の言語を習得させる教育というのは、その言語の背景にあるもの（文化や歴史など）をも引き受けることであり、このような方針を明確に打ち出している国際言語文化センターの教育は、非常に価値あるものだと考える。実際、国際言語文化センターは全学部の学生の教育と関わっており、各学部配属されている教員と二人三脚で学生を育てている。先ほど紹介された世界で活躍している卒業生の中に私がよく知る文学部の学生がいたが、「甲南大学が彼らを育てた」と誇り高く言えるのも、とりわけ、国際言語文化センターの先生が、言

葉を使いこなせることがどれほど強力な武器になるか、ただ言葉を話せるだけではなく、何が話せるかという中身、情報や知識の育成に関する教育に関わってくださっているからだと思う。事実、来年JICAに就職してアフリカへの赴任が決まっている私のゼミ学生からも、中村耕二先生はじめ、国際言語文化センターの先生方から強い影響を受けたことを聞いている。全学教育に国際言語文化センターの先生がいかに深く関わっているかは、いくら強調してもしすぎることはないだろう。

次に、文学部教員として、中村耕二先生の報告にあった、「top-downではなくコミュニケーション型の授業の大切さ」に全く同感である。今までは「大学で講義を受ける」、「先生から教えてもらう」という受身の授業形態でよかったのだが、今日、学生たちの相対的な力の変化（劣化）によってだろう、top-downの授業に学生の多くは魅力を感じていない。授業評価アンケートからは、自ら参加し、自分が何をしているかを実感できる授業が学生から圧倒的な支持を得ていることが知れる。また、今までは大学に入学することが問題だとされてきたが、今は大学卒業時の学生の質保証が重視されている。今後、グローバルに拡大した競争社会において、本学がどのような学生を育て、送り出せるかが問われることになるが、異なる言語を話す人たちの背後にある文化の違いにも目配りができるような人材を輩出するためには、授業方法自体を変える必要があると、文学部の教員として痛感する日々である。

3つ目に、歴史学を研究する者という立場からのコメントだが、私は明日、日本学術会議主催で行われる、日本の歴史教科書を議論するシンポジウムにパネリストとして参加することになっている。先ほど、中村典子先生は「EUは多様性を尊重し、多様性が人間性を豊かにしていく」と述べていたが、それぞれの人が話す言葉が背負っているものを理解し、その多様性を受け入れることから、全てが始まると私と思う。そういう当たり前のことが、日本の歴史教科書には十分反映されていない。日本の大学制度もそこでの学問も明治維新以降に発展したため、どうしても欧米の影響を受けざるをえず、欧米の歴史認識や世界観を無意識に受け入れているが、今はもっと多面的な見方をする必要がある。欧米の意識では不道徳や怠惰にしか感じられないものに、別の意味もあるからである。そういう多様な見識も、言語に伴う教育のなかで養われていくものではないだろうか。

最後に、某テレビ局の番組審議委員として一言だけ。本日ある番組で、オセロの松嶋尚美さんが、大ファンである映画スター、ジョニー・デップとのインタビューの最後にこう語っていた。「ジョニーと話をするのはこれで6度目だ、言葉の壁のせいで、どこか胸に響かないものがある。次回会うまでに私は英語を勉強します。」これに対してジョニー・デップはこう答えた。「ならば僕は日本語を勉強します」一言語は人が互いを理解しあうためのツールだという、言語教育の原点を見る思いがする。